【解説】

第1問 世界史における「死の文化」

A

問1 正解④ (世界史上における法律) 1

- ①明代の律令制定についてはやや細かい事項だが、洪武帝が皇帝独裁体制を確立したことは基本事項であり、P. 166 の 1 で確認できる。
- ②ローマ市民に適用されていた「市民法」が、帝国領域の拡大とストア派哲学の影響を背景に、ローマ支配下の全ての自由民に適用されるようになった過程は、P. 92 に記載されている。『ローマ法大全』の編纂そのものはユスティニアヌス帝の時代で、頻出事項。P. 139 で確認しておきたい。
- ③インド史では、仏教とヒンドゥー教の関係を時代ごとに整理しておきたい。P. 98 ので、グプタ朝時代のヒンドゥー教の発展と『マヌ法典』の完成を確認できる。なお、P. 97 の 2 を見れば、ヒンドゥー教の聖典が『マヌ法典』のみではないことが確認できる。
- ④ホルテンシウス法は古代ローマで制定されたもの。P. 88 で、イタリア半島の統一(重装歩兵の活躍)と身分闘争が同時進行していること、半島統一末期にホルテンシウス法が成立し、ローマ史における民主共和政が生まれたことを見ておきたい。

問2 正解② (唐三彩) 2

- ①④彩陶はP. 105。仰韶文化との関連性が強い。同じページに黒陶の写真もあるが、こちらは竜山文化との結びつきが強いとされる。
- ②唐三彩はP118に掲載されている。副葬品であると同時に、デザイン等に西域の影響が強く見られ、唐文化の国際性の一端と言える。
- ③中国の陶芸技術とイラン方面の絵付けの技術が結合して、元代に流行したのが染付で、P. 165 に写真がある。

問3 正解① (古代エジプトとヒンドゥー教の神) 3

- a オシリス神の登場する「死者の書」は、エジプト人の来世信仰を知る上で重要な史料である。P. 72 を参照。
- b シヴァはヴィシュヌとともにヒンドゥー教の主神。P. 97 を参照したい。

B

問4 正解④ (ワッハーブ派) 4

イスラームの原点への回帰を唱えるワッハーブ運動は、オスマン帝国の辺境とも言えるアラビア半島で始まり、サウード家の権力と結びつくことでワッハーブ王国を成立させた(P. 243 の用語解説参照)。この王国は何度か消長を繰り返しながら、現在のサウジアラビアへつながっていく。P. 242 の¹をスタートとして、P. 272 の年表まで追いかけておこう。P. 272 には³にはより詳しい解説もあるので、あわせて参照したい。ワフド党はエジプトの反英民族運動の中心的存在で、1922年という早期の独立に導いた。P. 272 の¹参照。

問5 正解① (墓) 5

a P. 109 に始皇帝陵と兵馬俑坑の写真がある。

b カタコンベは地下墓室であるが、キリスト教が迫害されていた時代には、礼拝所としても使用された。P. 95 に写真があり、すでにキリスト教美術の発展の芽が感じられる。あわせて、ローマにおけるキリスト教の迫害状況について、P. 94 の¹で確認しておきたい。

問6 正解② (トルコ系の国家・王朝) 6

トルコ人の西進や国家形成については、P. 127 に詳しい。ゲルマン人の移動以上に、ユーラシア規模の広範囲な活動が見られるので必ず整理しておくことが必要。

① エフタルの強勢は P. 22, 23 の地図で見たい。ササン朝やグプタ朝を圧する勢いである。しかし、突厥も勢力を拡大しつつあり、これと結んだササン朝のホスロー1世がエフタルを滅ぼした。P. 76 も参照。

② ウイグルの強勢は P. 28, 29 の地図で確認。唐代の安史の乱との関係は頻出事項である。このウイグルは P. 32, 33 の地図では西に移動している。その原因は北方に記載されているキルギスである。なお、ウイグル人の移動はトルキスタンの成立を促したことを P. 156 の用語解説でおさえておこう。

③ P. 32, 33 の地図にカラハン朝とサーマーン朝がある。カラハン朝の領域が、移動したトルコ系ウイグル人の領域と重なっていることにも注目したい。カラハン朝

はイスラーム国家となり，イスラーム世界でトルコ人が大きな役割を果たす契機となった。なお，イラン系のサーマーン朝は，10世紀末にカラハン朝に滅ぼされた。

- ④ホラズム朝は盲点になりやすい。P. 36 参照。13世紀にチンギス=ハンにより滅ぼされた。モンゴル人の征服活動については，P. 162 の地図 **A** で整理できる。

C

問7 正解② (最後の審判) 7

ゾロアスター教の「最後の審判」の思想や「終末論」は、ユダヤ教からさらにキリスト教・イスラームへ影響を与えた。P. 77 の 3 参照。これを図像化したものがミケランジェロの作品 (P. 191) である。

問8 正解① (フィレンツェ) 8

フィレンツェについては P. 189 に詳しく記載されている。毛織物業で栄えたこと、メディチ家の財力による支援が得られたこと、ブルネレスキなどが活躍したことなど、全て確認できるだろう。

ハギア=ソフィア聖堂はコンスタンティノーブルの聖堂(キエフにも同名の聖堂がある)。P. 139, 140 参照。

問9 正解③ (ルネサンス期の文学) 9

ルネサンス期の文芸家の活動年代については P. 188 の 2 に詳しい。ただし、むやみに覚えようとしてもあまり意味がない。

まず、イタリア=ルネサンスの流れを確認しよう。14 世紀に先駆者として、ジョット・ダンテ・ペトラルカ・ボッカチオが登場する。15 世紀はメディチ家との関係が深いポッティチェリらが活躍した時代、16 世紀はローマ教皇の保護のもとに、レオナルド=ダ=ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロらの巨頭が活躍した。

カトリック教会に対する批判精神が強いと言われるネーデルラントやドイツのルネサンスは、宗教改革の初期と重なり、16 世紀前半に開花する。代表的人物はエラスムスであろう。なお、宗教改革の進展を受けて、ガリレイやコペルニクスの地動説が展開されるのは 16 世紀半ば以降となる。

カトリック色の強いフランスやスペインのルネサンスは少し遅れ、イタリア戦争後の 16 世紀後半が中心となる。

第2問 世界史上の国境

A

問1 正解④ (キャフタ条約) 10

露清間の国境・交易に関する条約は頻出事項であり、整理が必須。P. 233 の地図Cで、ネルチンスク条約→キャフタ条約→アイグン条約→北京条約→イリ条約の順序と定められた国境を確認したい。イリ条約は中央アジア方面への南下政策との関係が大きいこともわかるだろう。

このページでは、ロシアの東方進出・南下政策の観点から整理がなされているが、中国側から見るのであれば、P. 170 の1, P. 171 の地図A, P. 248 の年表や P. 249 の地図Cが参考になる。清はこのように国境を定めていったが、19世紀末には、その外郭をなす朝貢国を失っていった。

問2 正解③ (シベリア) 11

- ①④イェルマーク・ムラヴィヨフについては、P. 233 の3参照。
- ②ソヴィエト政権に対抗する干渉戦争とシベリア出兵については、P. 264 の地図A参照。
- ③シベリア鉄道建設は露仏同盟の締結を象徴するものであり、フランス資本の投下が大きな役割を果たしている。P. 233 の地図Cで同鉄道がウラジヴォストークまで延びていく様子を確認しておきたい。なお、露仏同盟の締結は、P. 229 の3にあるビスマルク外交＝フランスの孤立状態の消滅(P. 260 の1)を意味する重要事項。

問3 正解④ (日本とロシアの関係の歴史) 12

- ①ラクスマンの派遣はエカチェリーナ2世の時代。P. 233 の3, または、P. 204 のエカチェリーナ2世の解説を参照。
- ②P. 253 の6に日本の国域変遷図が掲載されているので参照したい。
- ③日ソ中立条約で背後を固めた日本は、フランス領インドシナ南部の進駐から対米戦争に踏み込んだ。P. 281 の3参照。独ソ不可侵条約→ドイツのポーランド侵攻

→独ソ戦の開始→大西洋憲章と、ヨーロッパ戦線が展開した後、太平洋戦争が勃発する。

④P. 284 に戦後史の中の日本の動向が示されている。朝鮮戦争を1つの契機として、日本の経済復興と国際社会への復帰が実現していく。ソ連が国連で拒否権を持っていることを知っていれば、④の文が正しいことが導きだせる。

B

問4 正解② (ポーランドの歴史) 13

ポーランドは1つの国の歴史としても題材にしやすい。P. 140 の¹→P. 203 の³を参照し、P. 232 の年表でロシア支配下のポーランドの状況を確認しておきたい。第二次世界大戦後のポーランドについては、P. 311 の²を見てほしい。農業の集団化率が低く、ソ連と一歩距離を置いていたポーランドでは、スターリン批判後の1956年に反ソ暴動が起こり、80年には自主管理労組「連帯」の議長にワレサ(後に大統領)が就任して、民主化までの長い道のりを歩んだ。

ルーマニアでは、1989年の東欧革命で唯一「流血」の革命がおこり、チャウシェスク大統領が処刑された。ほかの東欧諸国の戦後についても、P. 311 の²などで確認しておきたい。東ドイツのホーネッカー政権の成立と崩壊、チェコスロヴァキアの「プラハの春」挫折などは、本問と同様の出題は可能である。

東欧民主化の波の後、民族紛争が泥沼化したユーゴスラヴィアについては、P. 293で詳細に扱われている。

問5 正解② (ドイツの歴史) 14

ドイツの戦後史は冷戦そのものの歴史と言っても良いくらいで、P. 284～293の戦後史の概観ページで確認しておきたい。

- ①ドイツおよびベルリンの分割占領についてはP. 286。
- ②ワルシャワ条約機構と、これを封じ込めようとする西側の集団防衛機構についてはP. 287の³。西ドイツは北大西洋条約機構(NATO)の一員である。
- ③ベルリンの壁についてはP. 288に、建設の背景・写真・模式図など詳細な解説がある。建設したのは東ドイツ政府である。
- ④ニュルンベルク軍事裁判については、P. 283の³参照。ニュルンベルクと東京の軍事裁判はおさえておきたいところ。

問6 正解④ (国境の変更や領土の帰属) 15

この問の文章の正誤を判断するには、文字情報としての記憶ではなく、地図情報としての記憶が重要と考えられる。参照すべき地図を確認していこう。

- ①アルザス・ロレーヌはプロイセン=フランス(普仏)戦争でフランスが敗北した結果、ドイツ領となる。P. 228 の地図[B]を参照。ウィーン体制の地図は P. 222 にあるが、ここではアルザス・ロレーヌはフランス領のまま。なお、領有権の変遷の激しい両地方については、P. 228 の用語解説でフランク王国以降の流れが解説してある。テーマ史として出題されてもおかしくない地域なので、この機会に整理してみよう。
- ②ノルマン=コンクエスト以降、プランタジネット朝時代のイギリスでは、フランス王の家臣に該当する者がイギリス国王という複雑な状態が発生し、受験生を悩ませてしまう。この時期の英仏関係と、第2次百年戦争時代の英仏関係は、きっちり整理する必要があるだろう。P. 147 で推移を確認したい。また、百年戦争を通じて、大陸側のイングランド勢力はほぼ一掃されるが、最後まで残るのがカレーという町で、P. 147 の地図[E]に記載されている。
- ③アメリカの領土拡大については頻出事項で、地図そのもので出題されたこともある。P. 234 の地図[A]は極めて重要な地図であり、アメリカ領になる前の領有国や「買収」「併合」の区別などを整理したい。
- ④独ソ不可侵条約の内容は重要であるから、第二次世界大戦初期の独ソの動きを見るときには確認したい。ソ連のポーランド・フィンランド・バルト3国への侵攻は、P. 280 の[2]で確認しよう。東欧で勢力圏を分け合っていた独ソであるが、ドイツのバルカン半島進出がソ連の不信感を決定的にし、独ソ戦の開始を用意する。

C

問7 正解④ (中越戦争の時期) 16

P. 299 の 1 を見てほしい。ベトナム戦争が終結しベトナム社会主義共和国が成立した頃から、隣国カンボジアでは、中国が支持するポル=ポト派とベトナムが支持するヘン=サムリン政権が対立し内戦状態となる。中越戦争はこのような流れの中で理解したい。中越戦争の開始は、米中国交樹立や経済特区の設置と同じ年であることが P. 294 の 1 でわかる。中国の変動の流れもあわせて理解できれば、視野が広がる。

ちなみに、次の事項はこの問の a ~ d のどの時期に該当するか、P. 294 を見て考えてみよう。

- ・プロレタリア文化大革命が始まる
- ・大躍進政策の失敗
- ・日中平和友好条約締結
- ・ニクソン大統領訪中

問8 正解③ (中国王朝への朝貢) 17

東南アジア海域世界におけるマラッカや琉球の位置づけは、近年の世界史研究の中で重要性が増している。P. 169 に琉球のまとめがあるので活用してほしい。琉球の日中両属については年表に明記されている。中国への朝貢回数も同ページに示されており、琉球の朝貢回数が他を圧倒していることを確認したい。

魏晋南北朝時代の隣接諸民族の動きは P. 114 に詳しい。卑弥呼や倭の五王の動向は、世界史でもおさえておきたい内容である。世界史的視野で日本をとらえるには、各世紀の全体地図の「日本と世界」が役立つだろう。

問9 正解② (清が設置した機関) 18

中国の諸制度の変遷は最重要事項。巻末の「中国王朝の変遷」を見て、整理していただき、語句だけ並べて覚えても意味がない。内容も含めた地道な学習が望まれる。

- ①清代の軍機処は、内閣にかわる政治の中枢機関となる。P. 170 の 2 参照。
- ②中書省については P. 117 参照。

- ③理藩院は P. 171 の地図 A やチェックに見られる藩部の管轄にあたった。唐代の都護府などと対比されることもあるだろう。
- ④総理衙門は中国が列強の圧力を受ける中で、洋務運動時代に設置される (P. 248 の年表)。外務省に該当すると表現されることが多いが、この時代の中国にはまだ、朝貢・冊封の概念が残っていたことも事実である。

第3問 世界史上の経済政策

A

問1 正解① (前2世紀後半の出来事) 19

- ①張騫が派遣された大月氏はP. 13の地図に記載がある。武帝時代の事項は頻出であり、P. 12の概観年表やP. 111の④で確認してほしい。
- ②仏図澄は魏晋南北朝時代の西域僧。P. 115の②を参照。この時代の仏教関連では、法顕の渡印や三大石窟寺院も頻出であるから、P. 23で確認したい。
- ③中央アジア方面の歴史は、教科書で分断的に出てくるので盲点になりやすい。P. 156の②で整理しておきたい。また、P. 34, 35とP. 36, 37の地図を見て、耶律大石の西遷と西遼(カラ=キタイ)の成立を確認したい。
- ④班超の外征や、その部下甘英の西方派遣については、P. 111の④に記載がある。張騫と班超の区別はよく「狙われる」事項なので注意したい。

問2 正解② (ベトナムの王朝) 20

- ①マラッカがポルトガルの支配下に入った後も、ムスリム商人の活動やイスラーム国家の建設は周辺部で続いた。P. 45の地図とP. 169の⑤に見られるマタラム王国・バンテン王国などはその例である。
- ②チャンパーはベトナム南部に存在した港市国家の1つで、中国側での名称・表記を変化させながら17世紀まで継続した。東南アジアの他地域の国家との関係を把握する必要があり、P. 102の①の変遷表と年表を活用したい。
- ③パルティアは中国とローマを結ぶ東西交易で栄えたイラン系国家。P. 12, 14, 16の地図で横の関係(中国史やローマ史との関係)をおさえておきたい。
- ④カルタゴはフェニキア人の植民市。ポエニ戦争でローマと戦い、滅んだ。P. 88の①で、ポエニ戦争の経過とローマに与えた影響を確認しておきたい。

問3 正解③ (漢・武帝時代の経済政策) 21

後見返しの「中国王朝の変遷」でもほぼ確認できる。

- ①市易法は均輸法とともに、宋代の王安石の新法のうち、商工業関係部門で重要な

役割を果たした。新法の中身は羅列するのではなく、内容や目的を整理した方が覚えやすい。P. 153 の²も利用したい。

②均田制の採用が魏晋南北朝時代(北魏)にさかのぼることは後見返しの「中国王朝の変遷」で確認できる。均田制の実施率は定かではないが、仕組みそのものはP. 117 の⁶でわかる。

③武帝時代の商工業政策については、P. 110 の¹で確認。均輸法・平準法以外では塩・鉄の専売なども重要であろう。

④前漢期の貨幣は五銖銭(P. 110)。半両銭はP. 109 に掲載があり、秦の始皇帝の統一政策に含まれる。

B

問4 正解③ (ポルトガルの交易拠点) 22

ヨーロッパの植民活動については P. 211 の 2 枚の地図が重要。

- ・ポルトガル…ゴア・マカオ
- ・スペイン…マニラ
- ・オランダ…マラッカ・バタヴィア
- ・フランス…シャンデルナゴル・ポンディシェリ
- ・イギリス…マドラス・ボンベイ・カルカッタ

などの位置はおさえたいところ。

問5 正解② (アメリカ大陸の銀山) 23

銀の流通については P. 187 のテーマ「銀がつなぐ世界史」で確認しよう。

- ①クスコはインカ帝国の都。P. 185 の地図Aで位置を確認し、石積みの遺跡の様子も写真で見てください。
- ②ポトシの銀の行方は P. 187 の地図Aでわかる。日本の銀も含めて国際取引の重要な要素であったことを理解しよう。
- ③アンボイナは香辛料の大産地モルッカ諸島に位置する。P. 47 や P. 211 の地図A参照。

問6 正解④ (中国の税制) 24

これも後見返しの「中国王朝の変遷」でおさえることができる。

一条鞭法は、前問にも出てきた銀の流通を背景にしたもので、P. 172 に詳しい。ここからさらに、丁銀を地銀に繰り入れて一体化した税制が地丁銀制であるため、a と c の順序は明白。

両税法は、均田制から荘園制への変化を背景として成立した。国家から受給された土地に対してではなく、個人が資産として所有する土地等に課税する制度。唐代の徳宗期に成立しており、P. 116 の1で確認できる。なお、両税法は租庸調制とよく比較される。P. 120 の2を見ておきたい。

C

問7 正解④ (世界史上の関税) 25

a アヘン戦争の結果締結された南京条約と虎門寨追加条約の中身は P. 250 の表で確認できる。典型的な不平等条約で、望厦条約(対米)、黄埔条約(対仏)も同様の内容である。

b 穀物法の廃止は、イギリスのブルジョワジーの利益にかなうものであり、結果としてアメリカなどから安価な小麦を輸入しやすくなった。大きな流れでとらえるなら、19世紀イギリスの自由主義的改革の1つと考えられる。P. 226 の1を参照し、対外的にも「自由貿易」を強要するアヘン戦争と同時期であることも見ておきたい。

問8 正解① (ビスマルクの事績) 26

ビスマルクについては P. 229 に詳しい。

内政面では、カトリックを弾圧した文化闘争、社会主義者鎮圧法、社会保障的諸政策の実施に特徴がある。外交面では、ドイツに恨みを持つフランスを孤立させるためにロシア・オーストリア・イタリアと同盟網を形成し、ドイツの安定を確保したうえで、重化学工業の発展をめざした。

ビスマルクが特に重視したのはロシアとの同盟で、三帝同盟や再保障条約を締結した。しかし、1890年に皇帝ヴィルヘルム2世と対立してビスマルクが宰相を辞任すると、皇帝の「世界政策」(積極的な対外進出)が顕著になり、バルカン半島をめぐるロシアとの対立が表面化、露仏同盟が結成されることになった。この変化は P. 260 の1でわかる。

問9 正解② (第一次世界大戦中の出来事) 27

①無併合などの原則に基づく「平和に関する布告」を出したのはロシアのレーニンであり、ウィルソンの十四カ条にも影響を与えた。P. 261 の年表で2つの文書の時期を確認したい。

②ドイツ領であった南洋群島は第一次世界大戦後、日本の委任統治領となった。

P. 261「諸国の参戦理由」と P. 266 の2参照。ドイツはヴェルサイユ条約で、全て

の植民地と海外権益を放棄させられた。

- ③ ロシア革命→ブレスト=リトフスク条約→ロシアの戦線離脱, ドイツのキール軍港で水兵の反乱→ドイツ革命→ドイツが連合国と休戦, という流れは理解したい。

P. 261 の年表参照。

- ④ 中国共産党と中国国民党の対立と, 国共合作については P. 274 の 1 参照。第一次世界大戦中の中国ではロシア革命の影響も受けながら, 新文化運動(文学革命)が始まっていたが, 共産党の成立は 1921 年。

第4問 世界史上の言語

A

問1 正解④ (19世紀の出来事) 28

- ①「日本の膨張」については P. 252, 253 を参照。1を見ても、明治政府成立から間もない 1874 年に台湾出兵が行われている。台湾が日本に割譲されたのは 1895 年で、地図 D に明記されている。このページでは、日本と朝鮮の動きがクローズアップされているが、琉球処分や日清戦争も清の朝貢体制との関係が深いので、年表等で確認しておきたい。
- ②インドの民族運動については P. 273 の 5 参照。親英的だった国民会議派が、イギリスの支配に対抗して反英的になっていく過程と、その中で異色な存在となったガンディーの非暴力主義を確認したい。また、ベンガル分割令や全インド=ムスリム連盟の結成など、ヒन्दゥ教徒とムスリムの対立が民族運動に影響を落とすこともおさえておきたい。
- ③三国同盟の国際的な位置づけは P. 260 の 1 で確認しよう。ビスマルク時代から継続した同盟だが、未回収のイタリアをめぐってイタリア-オーストリア間には対立をはらみ、第一次世界大戦でイタリアは連合国側についた。
- ④P. 252 の年表を参照。日露戦争で朝鮮に対する影響力を決定的にした日本は、3 回の日韓協約を経て支配体制を強化し、韓国併合に至る。日韓協約はすべて 20 世紀初頭の出来事である。

問2 正解④ (アジアにおける固有の文字) 29

民族独自の文字使用は、近代的な意味とは違うにせよナショナリズムの表れと言っても良いだろう。

- ①漢字にかわるハングルの制定については P. 174 の年表と P. 175 のコラムを参照。
- ②中国史に登場する隣接諸民族の文字は P. 157 の 5 に示されている。突厥文字やウイグル文字は西方から伝わったアラム文字・ソグド文字の系統であるが、契丹文字・西夏文字・女真文字などは漢字の影響下にある。
- ③モンゴル軍を撃退することになる陳朝では、漢字をもとにチュノムが体系化され

ていった(P. 102 の年表参照)。

順序については、朝鮮は中国の明清代、遼(契丹)は中国の宋代、陳朝は中国の元代から明初、という対応関係になる。

問3 正解③ (1910年代の中国・朝鮮の言文一致と啓蒙運動) 30

ア新文化運動については P. 274 の²参照。

イ日本の朝鮮統治については P. 252 の¹参照。三・一独立運動の後、憲兵制度の廃止や朝鮮人の官吏登用なども行われていたが、日本国内でさえ治安維持法施行などで思想的統制が強まっており、朝鮮に啓蒙運動の自由が許される時代状況ではない。最後は皇民化政策に向かった。

選択肢の文化大革命については P. 295 の解説を見てほしい。劉少奇・鄧小平らのグループを「走資派」として毛沢東が非難し、大規模な権力闘争に発展した。

羈縻政策は唐代の対外支配システムで、P. 117 に用語解説がある。周辺民族に自治を認めつつ、都護府を通じて管轄した。冊封・朝貢との違いを理解しておきたい。

B

問4 正解③ (南アジアの諸言語) 31

近年の高校世界史では、地理的視野の育成が重視されている。これは単に地図を使って勉強する、ということに留まらず、気候・風土が人々の生活や歴史に影響を与えている事実を認識してほしいからである。

言語の分布は折込⑦にある。地理的なページであるが、必要に応じて見ておきたい。メソポタミアを最初に「統一」したアッカド(P. 71 の③参照)の言語は、その後国際共通語の1つとなり、楔形文字の文書を残した。

南インドが、タミル語を使用するドラヴィダ系王朝の地域であったことは、P. 99のチェックで確認しよう。古いヴェーダの言語として知られるサンスクリット語と、その話者であるアーリヤ人はインド=ヨーロッパ語系の民族である。現在のインドでは、サンスクリット語は死語となっているが、同じ系統のヒンディー語が使用されている(折込⑦のコラム参照)。

問5 正解③ (南アジアの諸言語) 32

インダス文字は遺跡等に多く残されているが、未解読である(P. 97の写真④の解説参照)。ただし、遺跡からはシヴァ神の原型と見られる像や牛が刻まれた印章が出土しており、後のヒンドゥー教につながる要素の一部が、既に存在していたことが推測されている。

ムガル帝国はイスラーム国家である。イスラーム世界でコーランを記したアラビア語が重要なのは当然だが、イラン系官僚が重用されたことからペルシア語も重視されることが多く、ムガル帝国の公用語もペルシア語であった(P. 181の④参照)。

問6 正解② (1950年代に起こった出来事) 33

- ①インドとパキスタンの対立は、イギリス連邦からの分離独立にまでさかのぼり、ヒンドゥー教徒とムスリムの対立が背景となっている。P. 297の①を見て、カシミールをめぐる争いやガンディーの暗殺、両国の核実験の強行などを確認しよう。P. 313にも、両国の核実験は明記されている。
- ②ハンガリーの反ソ暴動は、ポーランドの暴動と同様、スターリン批判を背景とし

た、東欧の自由化をめざす動きの1つと考えられる。P. 311 の $\boxed{2}$ で確認しよう。

スターリン批判は大きな転換点であるため、1956年という年号は覚えておこう。

③中華人民共和国の国連代表権獲得については、アメリカのデタント外交(ニクソン大統領訪中発表など)が背景にあり、ベトナム戦争末期の国際情勢と深い関係にある。P. 290 の $\boxed{2}$ の図の意味を、解説を読んで理解しておこう。

④キューバ危機はソ連のフルシチョフの時代。P. 288 参照。

C

問7 正解② (ヨーロッパの言語の歴史) 34

ギリシア人の同胞意識の例としてのオリンピアの祭典、および、異民族に対する対抗意識(「バルバロイ」という言葉)については、P. 79 のチェックとコラムを読もう。神聖ローマ皇帝はルター派をおさえこみたかったが、フランスやオスマン帝国との対立を同時に抱えていたため、結局アウクスブルクの和議で譲歩せざるを得なかった。当時の複雑な情勢については、P. 195「宗教改革時の国際関係」に詳しい。

問8 正解① (未回収のイタリア) 35

イタリアの統一過程と未回収のイタリアについてはP. 228 の地図Bで確認しよう。

問9 正解② (アフリカの歴史) 36

- ①アクスム王国はナイル川流域。P. 130 の地図Aを参照。
- ②奴隷輸出はギニア湾から。P. 211 の地図Bを参照。
- ③1960 年が「アフリカの年」で、このときの独立国はP. 304 の地図Aを参照。
- ④1963 年に設立されたO A Uが 2002 年にA Uへと発展した。P. 289 や P. 304 の1を参照。